

審査の結果の要旨

氏名 鈴木 征吾

本研究は、医療依存度の高い小児の HRQOL の実態と、レスパイトケアが小児の HRQOL に及ぼす影響を明らかにするために、小児用の HRQOL 尺度である KIDSCREEN を用いて、医療福祉サービスおよび学校でのレスパイトケアが小児の QOL に与える影響を検証したもので、下記の結果を得ている。

1. 本研究では、特別支援学校の各校長から協力を得てリクルートを実施した。対象年齢にある医療依存度の高い小児の 95% が在籍する特別支援学校を通じて、推定される母集団のおよそ 7% (618 名) から有効回答を得た。日本における医療依存度の高い小児の特徴として、神経系の疾患と先天奇形及び染色体異常で全体の 83% を占めていた。歩行補助具等を用いた歩行が可能な小児が 12%、言語指示に従うことのできる小児が 24% 含まれた。82% が経管栄養を行い、26% が非侵襲的陽圧換気を含めた人工呼吸器を使用していた。このように、身体障害児と比較すると、医療依存度がより高く、知能や運動機能に障害のない小児も含む集団であることが確認できた。
2. 小児の全般的な HRQOL 得点の平均は 37.1 点 (SD = 10.3) で、5 つの下位尺度得点は普通学校に通う児童生徒を対象とした得点と比較していずれも有意に低かった。特に、Physical well-being、Autonomy & Parent relation、Peers & Social support において 1.53～1.95 の大きな効果量があった。
3. サービスの種類別で比較すると、学校および通所サービスにおけるレスパイトケアが居宅および宿泊サービスにおけるレスパイトケアよりも平均的に長く利用されていた。特に、学校でのレスパイトケア時間 (月平均 70.2 時間) は最も長く、医療福祉サービスにおける合計レスパイトケア時間 (月平均 36.6 時間) よりも長かった。
4. 主介護者である親の 97% が母親で、69% が未就労であった。親の HRQOL における身体的健康 (SF-PCS) と社会的健康 (SF-RCS) は日本人女性の国民標準値と比較して有意に低く、SF-RCS は 1.02 と大きな効果量があった。
5. レスパイトケアが小児の HRQOL に与える影響に関して、各レスパイトケアを説明変数、小児の HRQOL を結果変数としたモデルは良い適合度を示した。結果は以下であった。通所サービスでのレスパイトケアは、小児の HRQOL を構成する Physical well-being、Psychological well-being、Peers & Social support の上昇と関連した。学校でのレスパイトケアは、小児の HRQOL を構成する Physical well-being、Psychological well-being、Peers & Social support、School environment の上昇と関連した。学校でのレスパイトケア

による小児の Physical well-being および Psychological well-being の上昇は、親の HRQOL によって部分的に媒介された。

以上、本論文は医療依存度の高い小児において、通所サービスと学校でのレスパイトケアが、小児の HRQOL の側面である身体的健康、精神的健康、社会的健康の各側面の向上と関連していることを示した。本研究はこれまで主介護者の介護負担軽減の観点から評価されてきた在宅医療におけるレスパイトケアを、被介護者に及ぼす影響に着目して検証したものであり、地域で生活する医療依存度の高い小児とその家族を中心とした医療支援体制の構築に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。